

【最優秀賞（国土交通大臣賞）】

明日への資源…

栃木県矢板市立片岡中学校 三年 村上 千鶴

「ちゃんと沸かしてあるお湯。安心して飲んでね。おいしいから、飲んでみて。」

この言葉を聞いたとき、私は啞然として、声も出ませんでした。

昨年十月、私は矢板市の中学生の代表として中国を訪れました。出発する前に家族から「水にはくれぐれも気をつけて。」と言われていましたが、海外旅行の経験のない私には、他人事にしか聞こえなかったのです。でも、そんな自分の考え方を見直す機会は、すぐにやって来たのでした。

中国に着いて二日目。日本とは違う街並みを見ながら、私は研修する学校へと向かいました。学校では、たくさんの生徒たちが私たちを迎えてくれていました。私のパートナーになった「陳楠」とは、彼女が七月に訪日団の一員として片岡中学校を訪れたときから、文通などを通して交友を深めていました。彼女との再会に、私は一人で舞い上がっていたのですが、そこにお湯が振る舞われたのです。彼女の、「安心して飲んでね。」という言葉が耳から離れませんでした。そんな私に、彼女は、「日本に行って驚いたこと。それは、水のことなの。だって、水道水がそのまま飲めるのだから。水は、日本の豊かさの象徴だわ。日本はお金持ちで、食料も豊かで…。」

日本が大好きだと、訪日のときから口にしてきた陳楠は、日本の豊かさのイメージを次々に口にしていました。

彼女の話聞きながら、私は自分の水に対する認識が崩れていくのを感じました。水は中国ではお金にも勝る、貴重な資源なのです。私は、水というものの存在を見直さないわけにはいきませんでした。

帰国後、「世界の水」についてのあるテレビ番組を見て、その思いは一層強いものになりました。その内容とは、中国の黄河が、水の使い過ぎで深刻な水不足に陥っているというものだったのです。古代文明を生み出し、四千年以上もの人々を潤してき

た大河が断流し、地面はひび割れ、作物は育たず、生活水すら配給でまかなっているというのです。画面に映し出される人々の姿からは、農地を潤せないもどかしさ、悔しさ、悲しさ、そしてやり場のない怒りが伝わってきました。この状況を打開するためには、長江から水を引くしかないと言います。それを実現するためには、莫大な労働力、財力、時間が必要ですが、既に具体的なプロジェクトが立ち上がっているのだそうです。この番組では、さらに水不足が世界的規模で起こっていること、中には水を他国から買っている国さえあることを伝えていました。水不足は、二十一世紀に生きる私たちすべてが取り組まなければならない問題だと強く感じました。

それなのに、私自身はこれまでどのように生活してきたでしょう。私の住む矢板市は、水の豊かなところですよ。水道の蛇口をひねれば、おいしい水が何不自由なくでできます。節水なんて考えたこともありませんでした。でも、豊かさの上にあぐらをかいては危険なのです。現に、春先の雨不足で、田植えの時期が遅れているという話を耳にしました。

今回、自分で実感したこと、見たことを重ね合わせ見ると、私たちはどれだけ幸せな場所に生活しているのかと感謝の気持ちが湧いてきます。そして、豊富にある水だからこそ無駄使いせず、有効に活用しなければならないのだと心に刻みました。

この地球の大地を血管のように流れる川、そして広がる海。人間はもちろん、この地球に生活している生物すべてが、水とともに生きています。水は私たちの命を守り、育て、水の生み出す自然は心に安らぎをもたらします。この「水」との関係は、その先、永遠に続いていきます。だからこそ、このかけがえのない関係を守る努力をすることが、私たちに課せられた責任なのだと思います。